「泉質主義」を貫き、時代を紡ぐ草津温泉

――次世代へのバトンタッチが責務

3

草津温泉旅館協同組合理事長　黒岩　裕喜男

「歩み入る者にやすらぎを、去りゆく人にしあわせを」

これは、昭和五十四年に制定された、草津町の町民憲章です。この言葉は草津温泉をよく訪れていた東山魁夷画伯がドイツ・ローテンブルク市の城壁の門に刻まれているラテン語を翻訳し、当町へ贈ってくれたものです。中世の城塞都市で使われた意味合いとは、多少ニュアンスが違うかもしれませんが、観光業が経済の大きな支柱である草津温泉にとって、非常にシンプルで、あるべき理念を言い表していると感じます。草津町の歴代町長もみな、この町民憲章の言葉に深く共感し、時に言葉の意味を再確認しながら、施策の基本理念においてきました。

草津町の概況

面積約五十平方キロメートル、約七〇％が上信越高原国立公園内に位置しています。平均標高千二百メートル。年間平均気温七℃、夏季（七～九月）十八℃。人口約七千五十人。入込客数約二百八十万人、宿泊客数百八十万人。人口は、昭和五十年代の約九千五百人をピークに減少し、過疎化傾向にありますが、就労人口を合わせると九千人以上になり、労働力に関しては、人口が流失した分を近隣からの就労と短期の住み込みによる雇用によって賄っている状況です。入込客数は、平成六年と十七年の約三百万人が最も多く、昭和六十年代は二百五十万人、その後増減があり、昨年は二百七十万人となり、近年の七～八年間はピーク時より約一割減少。宿泊客数も同様に平成十年代中ごろの二百万人より約一割の減少となっています。宿泊施設数は、旅館組合会員数百十軒、他ペンション・民宿を加えると、約百五十軒になります。概算ではありますが、宿泊施設の収容総数が約一万五千人とされているので、昨年の百八十万人で割ると、定員稼働率、約三三％となります。ただし、この数字には寮、保養所、リゾートマンションの宿泊は含まれていないので、実際には、宿泊人員はもっと多いと考えられます。

草津温泉の歴史――ベルツ博士の功績

草津温泉の始まりについて、どこの土地にもよくあるように、古くからの言い伝えはいくつもありますが、史実として残っているのは、一一九三年に源頼朝が温泉に入浴に訪れた、という記録からです。その後戦国期には多くの武将や文人が訪れるようになりました。実際に温泉地として確立するのは、江戸期に入り、幕府直轄の天領となってからでした。政局が安定し、「天下泰平」の世になって、庶民生活・文化の発達により来浴客が年間二万人を超えるようになったのです。

・明治時代

明治期に入り、東京医学校（現、東京大学医学部）で教鞭をとり、明治天皇・大正天皇の侍医でもあったドイツ人医学者のベルツ博士（注）（**写真1**）が明治十一年に初めて草津を訪れました。ベルツ博士は、草津温泉の量、質、自然環境の良さ、そして、長年培われてきた入浴法や温泉療法に注目し、その後しばしば訪れました。そして、泉質や「時間湯」と呼ばれる草津独特の入浴法の効能などを科学的に調査・分析し、草津温泉の医学的有効性を評価しました。その結果を基に温泉の効能を生かす入浴法についての指導も行ったのです。

写真1　エルヴィン・フォン・ベルツ博士（草津ベルツ記念館所蔵）

ベルツ博士は、「草津には、無比の温泉以外に日本で最上の山の空気と、全く理想的な飲料水がある」「もしこんな土地がヨーロッパにあったとしたら、カルロヴィ・ヴァリ（チェコにある温泉）よりもにぎわうことだろう」と称賛し、素晴らしい温泉保養地として、広く世界に紹介しました。また、当時の町の有識者たちにもヨーロッパの温泉保養地を紹介し、そのように発展させる方法も指導しました。町としてすぐにそのような開発や変革に着手したわけではありませんが、今で言う「リゾート」の概念が初めて導入された大きな転換期でした。

・大正から昭和へ

その後、大正初年のスキー導入、信越本線開通による物流、そして、いち早く観光客の輸送を目的にした草軽電鉄（草津～軽井沢間）の開設（大正十五年全線開通）など。また、戦後間もない昭和二十三年の日本で最初の邦人用スキーリフトの架設など、草津が温泉保養地として発展していった根幹には、ベルツ博士によってもたらされた概念が脈々と受け継がれていたと思います。

・戦後から現在へ

そして、戦後の経済成長期の国民的レジャーブームによる観光客の激増、宿泊施設の大型化、団体客時代の到来、リゾートマンション乱開発の時代、旅行形態の多様化、平成以降の長引く不況、またはその常態化等、めまぐるしく変わる時代の変遷のなか、他の多くの観光地と同様、苦しみながらも、さまざまな対応に迫られながら、現在に至っています。

草津温泉・近年の観光地づくりの取り組み

・『草津温泉ブラッシュアップ計画』（平成九～十一年）

平成初年以降バブル経済の崩壊による低迷期が続くなか、もう一度観光地としての魅力に磨きをかけ直そうと、観光協会の主導のもとに財団法人日本交通公社とともに取り組みました。この計画は、当時結成された間もなかった旅館組合の女将の会（現、湯の華会）や、商工会・旅館組合両青年部が新たに将来に向けて行動を開始できるような勉強会、検討会の開催など、計画の策定の過程を重視したものでした。第一年次には、計画に携わるメンバーが共通認識できる目標として、「もう一泊したくなる、草津温泉」を設定。第二年次には、ベルツ博士が提唱し

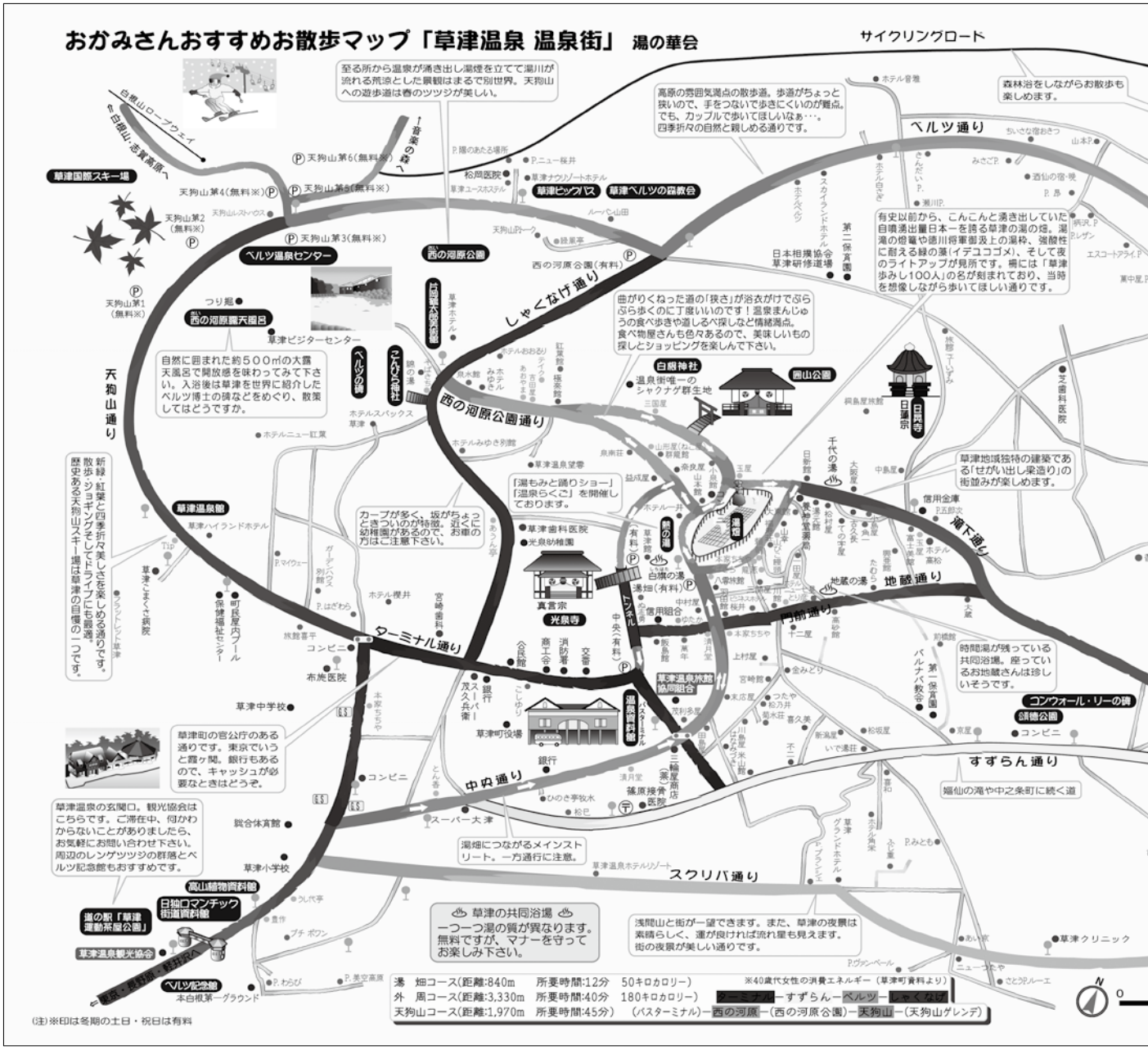

図1 「おかみさんおすすめお散歩マップ」(草津温泉 湯の華会)

た「国際的な温泉・高原リゾート」をテーマとして、勉強会を催しました。最終年には、ベルツ博士の意志を酌み、草津温泉が歴史的に培ってきた温泉文化を見直し、現代に新しい感覚の「湯治場」を再現することが、「国際的な高原・温泉リゾートとしての草津温泉」の実現に資するとの結論に至りました。

このような三年間の計画策定の過程において、「湯の華会」では、代表的な名所の一つである湯畑周辺の魅力アップ、草津の道の研究、白根神社(草津で最も由緒ある神社であるが普段は参拝客が少ない)の研究をテーマに勉強会を重ねました。温泉街の街歩きや周辺のハイキング等、実際に観光客の目線で歩き、その体験をもとに「おかみさんおすすめお散歩マップ」(**図1**)を作成しました。この地図は、坂の傾斜度や階段、ゆっくり歩いた時の所要時間、カロリー計算なども盛り込まれており、改訂を重ねて現在でも利用されています。

また両青年部では、合同で新しい協議会を立ち上げ、年間行われてい

る各イベントを見直し、今後の課題を検討して、その結果を各イベント主催者に提案。さらに、自らも積極的に関わっていくという機運も生まれました。折しも、当時、開催が迫っていた日韓共催のサッカー・ワールドカップのキャンプ地への立候補という大きなプロジェクトにも挑戦しました。この取り組みは、参加国との調整がつかず、誘致の成功には至りませんでしたが、スポーツのできる温泉地としての認知度アップにつながりました。実際、その活動を通して、当時草津の旅館や飲食店で働きながら群馬県社会人リーグに参加していた選手たちと交流ができ、それが日本サッカー協会の目にとまり、これが温泉地発として全国的にも例を見ない、Jリーグチーム「ザスパ草津」の誕生へと発展することになったのです。また、そのザスパ草津の誕生に伴い、町によるグラウンド整備が進み、それまでも催されていたサッカー大会の参加者も増加し、今では、少年・少女・女子・学生等の大会数も増え、七、八月の二カ月間に約二万五千人を集客するに至っています。

人コラム

草津温泉の人々～ベルツマインドを伝え続けていく

市川　薫氏　ホテル一井　女将・湯の華会初代会長

いまの日本人は人間関係が希薄になっていますが、草津は濃いのです。昔、隣の家の子を叱ったのに近いものが残っています。お互いルーツも分かっていて普通なら放っておくことを言ってくれるのはありがたいものです。

また、草津の人は国際的です。山の中の七千人の小さな町ですが姉妹都市が五つあり五十年にわたる交流を続けていますし、草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティヴァルも三十三回目になります。たとえ言葉が通じなくとも、コミュニケーションが成り立つところがすごいのです。そして、外から見た草津の良さを実感して、子供たちに伝えてきました。これはベルツ博士（注）に由来すると思っています。明治時代の草津町民にとっては、温泉はあって当たり前でしたが、博士は何度も草津に来てくれて長い時は一カ月くらい逗留して、おいしい水と澄んだ空気、温泉は天与の恵みで大切にすべきということを気づかせてくれました。そして、町民はベルツマインドを脈々と伝え、明治以降少しずつ形にしてきました。その現在の象徴が「泉質主義」です。温泉に軸があるから何をするにもぶれません。町長が変わろうともバトンタッチをして、湯畑を守り守られながらやってきました。温泉への感謝と謙虚さが原点です。

ヨーロッパには四百年たっても未完成な教会がありますが「文化は未完成であるべきで、次の世代にも未完成のものを伝え、人類が続く限りそれが続いていくことで伝わる」と聞いてなるほどと思いました。そういうことを草津の人は海外に行きどこかで学んでいて、そのような感覚ができているのかもしれません。湯畑も常に動いていて未来永劫未完成。だから、次にテーマをつくって取り組み、伝え続けていけるのです。

（いちかわ　かおる）

（二〇一二年七月二十四日談）

聞き手：梅川智也・石山千代

さまざまな効果をもたらしたブラッシュアップ計画でしたが、三年間を通しての一番の収穫は、それまで団体ごとに行われていた、地域の活性化やその取り組み・イベントなどに、どこが主催であれ、観光協会、旅館組合、商工会、行政、議会までも、草津が一体となって取り組むようになったことだと考えています。

・『草津の冬を考える会』（平成十三年度）

ブラッシュアップ計画にも一区切りつくと、今度はJTB旅館ホテル連盟の草津地区会が主体となって財団法人日本交通公社とともに取り組んだのが、「草津の冬を考える会」でした。これは、スキー需要の低迷・激減に伴い、年間の最オフ期になった冬（十二～二月）の誘客を何とかしようと始まった会です。メンバーはJTB旅ホ連の他に各団体の任意のメンバーで話し合いを重ねました。しかし、なかなか「冬を売る、冬が売れる」ような効果的なアイディアがまとまらず、最終的に「草津は季節を問わず、売りは温泉そのもの」という原点回帰的なごくシンプルなものになりました。「それでは、我々自身がもう一度草津の温泉について勉強し直し、泉質や効能、入浴法など町民のだれもが胸を張って観光客またはそれを知らない人に説明できるようにしよう」という考えから、平成十三年十二月には、「泉質主義」を宣言（**図2**）。草津の温泉ついての冊子を五連で作り、誇れる「泉質」の良さを訴求しました。この「泉質主義」は、十年以上経て、現在でも大きく掲げられ、草津温泉の代名詞であるかのごとく定着しています。この言葉によって、皆が草津温泉を誇りを持って語れるようになり、ブランドイメージのアップにも大きく貢献するものとなりました。

泉質主義宣言
草津温泉は泉質を大切にします。
一、 自然湧出泉として湯量日本一です
一、 源泉かけ流しの天然温泉です
一、 強力な殺菌力を誇る温泉です

泉質主義
草津温泉

図2 泉質主義宣言と泉質主義のロゴマーク

・『草津温泉歩きたくなる観光地づくり』（平成十五年）

これは、町行政主導の事業で財団法人日本交通公社と一緒に取り組みました。広く全町民に参加を呼びかけ、約百人の参加者とともに行われました。数多くのワークショップを行い、長年の懸案である温泉街への車両規制にも取り組み、ゴールデンウイーク、お盆、秋季の連休などには、交通社会実験（パークアンドライド）も行われました。このパークアンドライドは国の補助金事業となり、平成二十二年度まで実施されました。残念ながら、車両規制は、全員のコンセンサスが得られず常態化はされていませんが、将来に一石を投じたと考えています。また、この事業の結果として、路地裏や歩道の整備が進められ、現在も進行中です。

草津温泉・現在の取り組み

・『草津観光立町基本計画』（平成二十一年）

草津町議会では、平成十九年に草津町観光立町推進基本条例を定め、その実現のためにこの計画が策定されました。これは条例の定めに従い、今までの取り組みや町民憲章などを踏まえた計画で、これからの草津の指針となるものです。この計画と同時に景観法に基づいた景観計画の策定と現在の景観条例の改正を目標に、平成二十一年には景観行政団体が発足。温泉街を五つの地区に分け、順次話し合いを行い、景観まちづくり協定（街並みのルール）が締結できた地区より社会資本整備交付金の補助を受けて、平成二十三年度より、通りに面した店舗の改装や看板のかけ直し、壁の塗装などに一定の補助金が受けられるようになりました。この事業は開始より十五年間継続されるもので、少しずつ色調も整ってきました。さらにより歩きたくなる温泉街を目指していきます。

・『湯畑の再開発』（平成二十四年～）

最後に今年度より草津のシンボルである湯畑の再開発が着手されました（**図3**）。今年度は総湯「御座の湯」

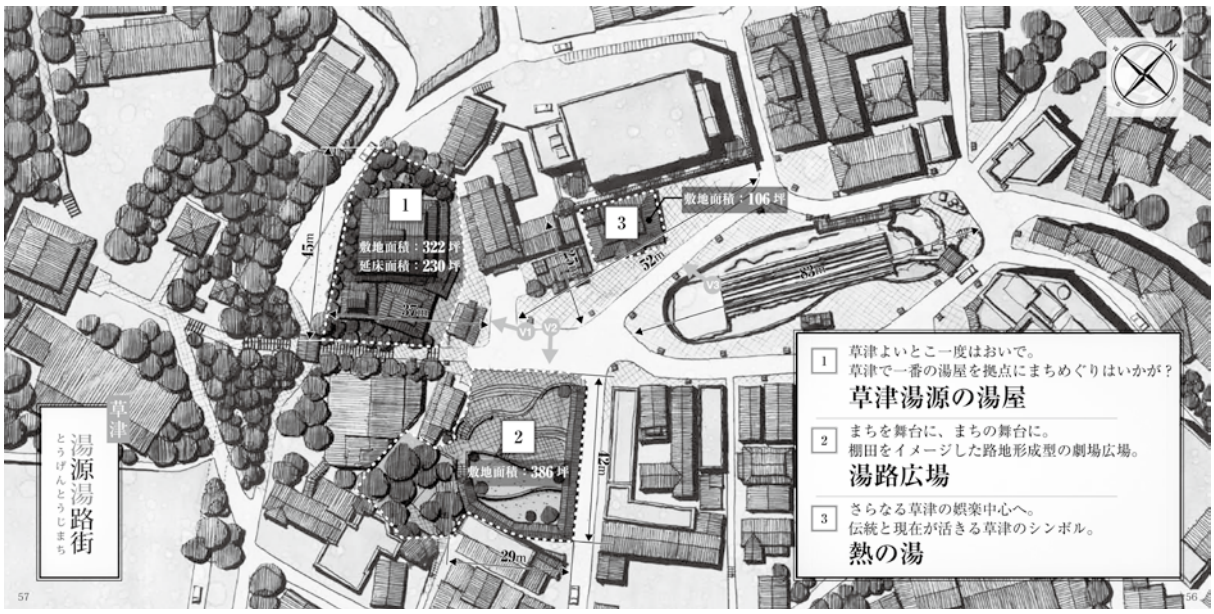

図3　草津 湯源湯路街 『草津めぐり 世界の名所「草津温泉郷」の歩き方』（草津町）

が建てられ、来年には多目的に使える広場の整備、三年目には「湯もみ」のショーが行われる「熱の湯」（図4）の建て替えが行われる予定となっています。街並み整備の進行とあいまって、観光地としての魅力のアップにつながるものとして大きな期待を寄せています。

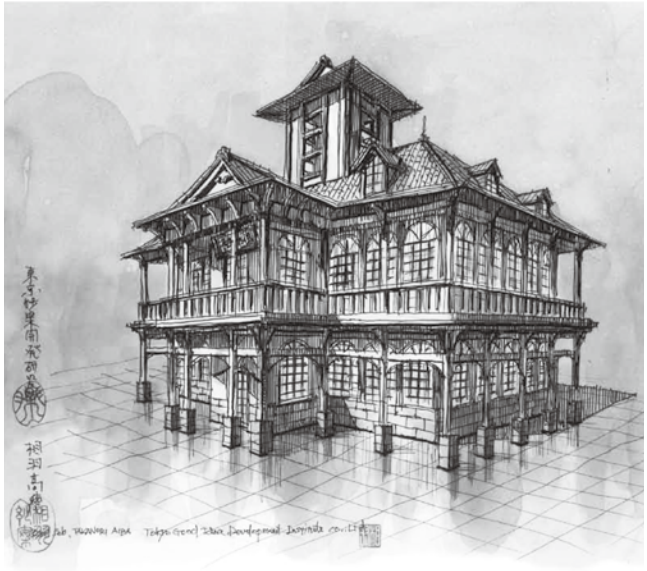

図4　熱の湯 『草津めぐり 世界の名所「草津温泉郷」の歩き方』（草津町）

魅力ある草津を次世代に継承する責任

いろいろと草津について書いてきましたが、もちろん例に挙がらなかった失敗例や継続できなかった事業は、私が知るだけでも、この何倍もあります。ただいえることは、成功・失敗は問わず、先人や先輩方が、その時々の時代の変化に対応し、いろいろ模索し、果敢に挑戦してきた結果、今の草津温泉があるということです。現在も問題は山積しています。草津町の概況で記したように、旅館の定員稼働率が三〇％程度で、皆生き残っていけるのだろうか、また、観光を支える人材がどんどん減少してしまうのではないか。今の時代を担う我々の年代にとって、時代の変化にさまざまに対応しながら、先人たちより受け継いだものを維持し、子供たちが戻ってきたくなるような魅力と雇用のある町を保ち、次世代へバトンタッチすることが最小限の責務であると考えます。

（くろいわ　ゆきお）

（注）エルヴィン・フォン・ベルツ（一八四九～一九一三）草津温泉を評価し世界に紹介した明治政府のお雇い外国人のドイツ人医師。東京医学校教授、明治天皇や皇太子の侍医を務める。「日本鉱泉論」（明治十三年）、草津の時間湯についての「熱水浴療論」（明治二十九年）等を記す。草津町は町制施行百周年を記念して「ベルツ記念館」を開館。草津町と博士の生まれ故郷のビーティヒハイム・ビッシンゲンは姉妹都市交流五十周年。

黒岩裕喜男（くろいわ ゆきお）
一九六三年草津町生まれ。早稲田大学卒業後、家業の旅館・望雲（創業一五九九年）を継ぐ。二〇〇一年社長就任（十五代目）。二〇一二年五月、草津温泉旅館協同組合理事長に就任し、現在に至る。